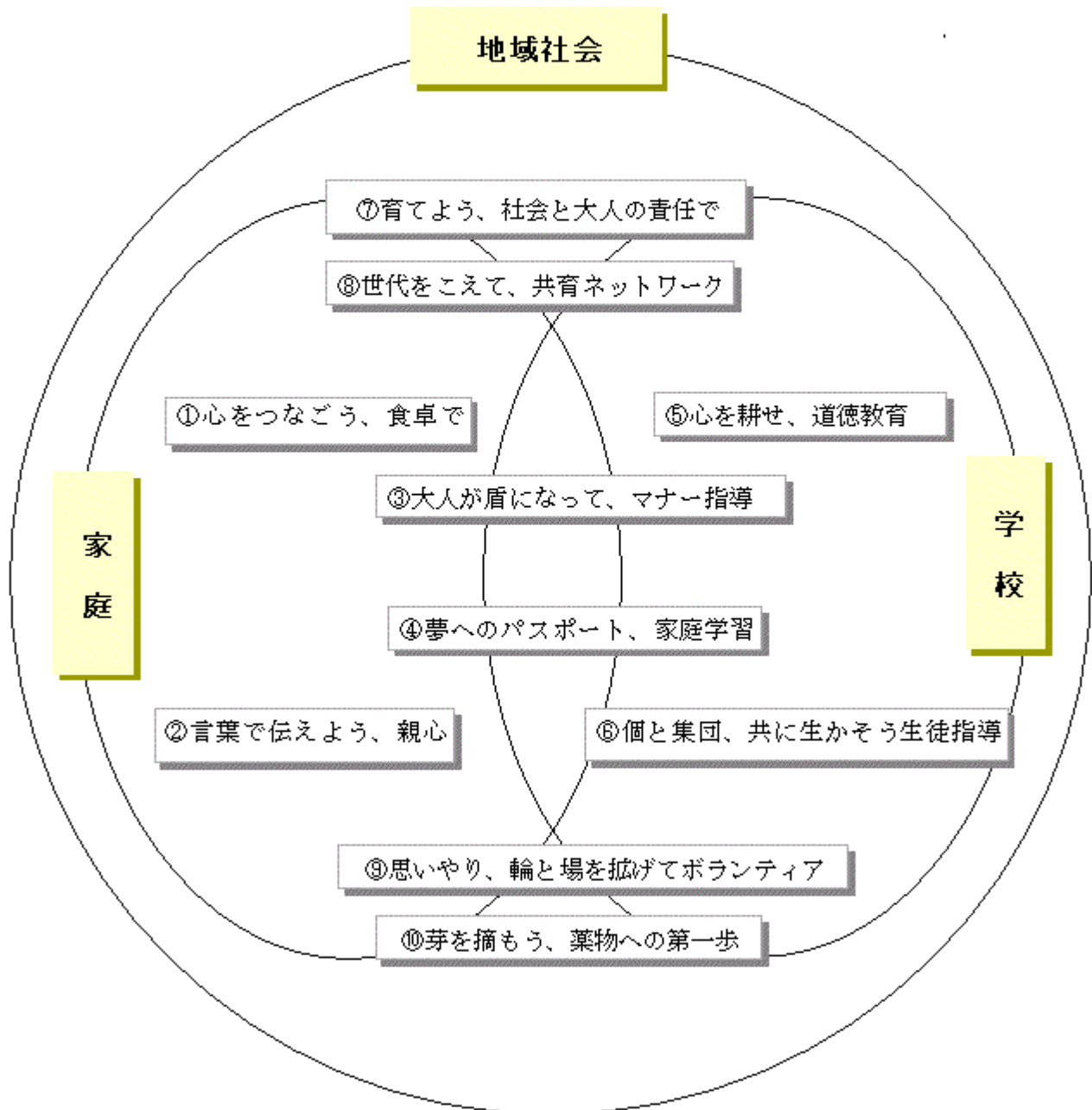


# 第1章

## 学校・家庭・地域社会へのメッセージ



メッセージ1  
(家庭へ)

心をつなごう、食卓で

食事は家庭生活の要であり、家族の愛情を受け取る行為でもあります。  
朝食や夕食のとり方によっては、児童生徒の規範意識に差がでることがわかりました。  
食事の際の家族の会話が、家族の絆や信頼関係を深めるうえで極めて大切なものであることがうかがえます。

毎日一定の時刻に、家族そろって食事をとりましょう。食欲や態度、会話の内容などは心身の健康のバロメーターであり、生活の乱れや病気の早期発見につながります。

たとえ、共に食卓を囲むことができなくとも、メモや手紙などをそえ家族の思いやりと一緒に味わう「心のディナー」の時間にしましょう。

健全な社会性や規範意識は、この毎日の積み重ねではぐくまれていくものです。

起床・就寝時間を決めて生活のリズムを整え、朝食をおいしく食べましょう。

夕食で一日をふりかえり、喜びや悲しみを共有しましょう。

親子で料理作りを楽しみ、作ることの喜びと感謝の気持ちを育てましょう。

バランスのとれた食事を通して、偏食や過激なダイエットを予防しましょう。

【メッセージの背景となる主な分析結果】

【ページ】

「家庭を楽しみ」と感じている児童生徒の方が、「家庭を楽しめない」と感じている者より、規範意識が高い傾向にある。----- 13～14

「朝の挨拶」をよくしている児童生徒は、していない者より、規範意識が高い傾向にある。----- 15～16

「早く寝ている」児童生徒は、「遅く寝ている」者より、「朝食を食べている」者が多い。----- 17

「朝食を食べている」児童生徒は、「食べていない」者より、規範意識が高い傾向にある。----- 18

「夕食を誰かと食べている」児童生徒は、「一人で食べている」者より、規範意識が高い傾向にある。----- 20

メッセージ2  
(家庭へ)

言葉で伝えよう、親心

他者を大切にすることは、自分が大切にされた経験から生まれます。「自分の身を守ろう」というメッセージをいつも送られている児童生徒は、規範意識が高いという集計結果がでています。

「自分は愛されている」という実感は、「親の温かい言葉」から生まれます。そこから、自分を信じる「自信」と「他の人ともよりよく生きていこう」とする人生に対する前向きな姿勢も生まれます。

もちろん、間違った行為に対しては、毅然とした態度でのぞまなくてはなりません。大人が真剣に善悪の判断を示すことは、子どものよりよい成長を願う行為であり、子どもの人格を大切にすることにほかなりません。

「大切だからこそ」守り慈しむ。「大切だからこそ」厳しく注意する。そんな姿を見て、子どもは家族を誇りに思い、お手本とするのです。

月に一度は、親が子どもと向き合い、夢や希望、悩みなどを語り合う、「親と子の語らいの日」を設けましょう。

「あなたは大切な人」というメッセージを送り続けましょう。例えば、コップを割った子を叱る前に、「大丈夫、けがはなかった。」というやさしさを。

子どもと同じ目の高さに立ち、愛情を込めて注意をしましょう。注意したあとは、温かい心で包み込みましょう。

家庭生活の中で、子どもに役割を持たせ、感謝し感謝される喜びを味わわせましょう。

【メッセージの背景となる主な分析結果】

「交通安全など自分の身を守ること」について「注意される頻度の高い」児童生徒は、「頻度の低い」者より、規範意識が高い傾向にある。----- 24～27

「家の人のすばらしさ」を認めている児童生徒は、家の人との積極的な関わりを求めており、「認めていない」児童生徒より、規範意識が高い傾向にある。----- 31～32

「何でも話せる人が家族にいる」児童生徒は、「家族にいない」者より、「家庭を楽しんでいる」と感じている。----- 50

下校後、「家の手伝い」に多くの時間を費やしている児童生徒は、そうでない者より、将来「家庭や家族を大事にして生きる」ことを希望する者が多い。----- 101

「髪を染めている」「ピアスをしている」「ズボンやスカートを決められたとおりにしていない」の3つのアンケートでは、子どもは不快を感じている割合が低く、逆に大人は不快を感じている割合が高くなっています。大人と子どもの意識の差が歴然としており、子どもと大人の対立点となっています。

「法規にふれないこと」「他人に迷惑をかけないこと」だけが人間としてのモラルではなく、徳性や品性、その場にふさわしい言動もより大切です。

大人一人一人が人生経験に基づき、社会的マナーの意義を理解させる指導へ意識を変えることが必要だと思われます。

基本的な生活習慣・基本的倫理観・自制心等の基礎的資質は家庭教育においてこそ培われるものであると考えます。

大人は人生経験にもとづき、社会生活におけるマナーの意義を具体的に話しましょう。

学校は、協調性や社会性を身につけるために忍耐や根気が要求されるところでもあります。そういう厳しい側面もアピールしましょう。

校則について、保護者や地域の人々に納得のいく情報を提供し、理解を得る努力をしましょう。

【メッセージの背景となる主な分析結果】

「学校の役割」で回答の割合が最も高かったのは教員・保護者とも「集団生活のルールを身につけさせる」である。----- 43

「髪を染めている」「ピアスをしている」「ズボンやスカートを決められたとおりにしていない」などの頭髪・服装の乱れに関して、児童生徒はあまり不快感をもっていないが、大人の不快感は強く、両者の意識の差は歴然としている。----- 54

「学校のきまり」がきびしいと思っている児童生徒は、きびしくないと思っている者より頭髪・服装の乱れに関する意識が低い。----- 56

保護者・教員とも年代が上がるにつれて、児童生徒の頭髪・服装の乱れに対してきびしい見方をする割合が高くなる。保護者の場合、30代までと40代以上の間の差が大きい。----- 57

大人が感じる「現在の青少年の憂慮すべき点」で、最も多いのが「自己中心的」で、2番目が「忍耐力がない」である。----- 96～97

学校週5日制の完全実施に伴い、授業時間が減り、学力の低下が懸念されています。児童生徒の家庭学習の時間は十分ではありません。また、志を高くもち、その実現に向かって積極的に学習に取り組もうという姿勢も欠けているようです。

しかし、学校週5日制は、主体的な家庭学習の習慣を形成するためのチャンスでもあります。

学校は、児童生徒が自分一人でも目的をもって学習を進められるように、学び方を身につけさせましょう。また、個々の学習状況に応じた家庭学習への励まし方や適切な課題の提示を工夫しましょう。

家庭学習は健全な生活習慣という基盤があって成り立つものです。家庭では、規則正しい生活の一環として、家庭学習の定着を図りましょう。

学習は、子どもたちの将来の夢や目標を実現するために必要な知識や技能や態度を育成するだけでなく「徳育的側面」をもつ営みです。知性を磨きながら、徳性・品性を高められるような主体的学習習慣を子どもたちに身につけさせましょう。

学校は、学習のポイントや到達目標を保護者や児童生徒にわかりやすく伝え、目的をもって学習に取り組ませましょう。

子どもたちの夢や志を育てるために、進路に関する学習を充実させましょう。

子どもたちに、自分自身の夢、憧れ、希望、志を語りましょう。

家庭でも好ましい家庭学習の習慣を育成するため、温かく励まし、根気強く支援しましょう。

「読書タイム」を日課に位置づけ、本に親しむ習慣を学校から家庭へ広げましょう。

#### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

「家庭と塾とを合わせた学習時間」は、小・中・高とも「ほとんどしない」「30分位」が4割強である。	21
「学習時間」の多少による人生観の明確な違いは認められない。	22
中高生が「将来希望する生き方」で、最も多かったのは「その日その日を楽しく生きる」である。	100
下校後、「読書」に最も時間を費やしている児童生徒は、そうでない者より、将来「知識や教養を身につけ、精神的に豊かな生活を送る」ことを希望する者が多い。	101
「学校の問題」について、高校の教員は、「学力の低下が進んでいる」と回答した者が最も多い。教員全体でも3位である。	44

友だちの悪い行為に対して、小・中・高と学年が上がるにつれて許容的になる傾向がみられます。思春期特有の「自我の目覚め」などからやむを得ないという見方もありますが、一方では、理性的な判断力の深まりとともに規範意識が高まるべきだという考え方もできます。理論的な説明を理解できるようになるのですから、理由を説明して規範意識を高める指導力が求められています。善悪をわきまえることや徳性・品性を高めるように具体的に取り組みましょう。

道徳教育は、教育活動全体を通して行うものです。まず学校生活の大半を占める授業が道徳教育の実践の場です。一人一人の思いや願いを大切にしたい達成感・達成感を味わうことのできる授業を工夫することが求められます。また、豊かな体験を通して人の生き様や文化にふれさせることで、社会性や規範意識がはぐくまれていきます。

**教科の特性を生かした心の教育を実践しましょう。**

道徳教育についての研修の機会を定期的に設け、「道徳の時間」を大切にしましょう。

高校でも道徳教育の理念をふまえた授業・LHRを計画的に実施しましょう。

学校の道徳教育についての情報を提供し、人生経験豊かな保護者や地域の人材を活用しましょう。

#### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

小学生の規範意識は極めて高く、中・高と学年が上がるにつれて、低くなる傾向がある。----- 51～55,65～71,81

「友だちの行為に対する善悪の判断」で、「暴力」「金品強要」「万引き」など他人に直接的に害を及ぼす項目については児童生徒の規範意識は高いが、道徳性が求められる項目については学年を追って低下する。----- 71

「学校の役割」として、「集団生活のルールを身に付けさせる」「学力を身に付けさせる」「豊かな人間性を身につけさせる」が教員・保護者ともに回答の上位3項目である。----- 43

「望ましい成長発達を支える取り組み」として「学校の道徳教育」の必要性をあげている大人が多い。----- 99

大人があげる「現在の青少年の憂慮すべき点」の上位3項目は、「自己中心的な考えや行動が多い」「忍耐力がない」「他人を思いやる心が乏しい」である。----- 96～97

## 個と集団、共に生かそう生徒指導

児童生徒も保護者・教員も、「気持ちをわかってくれる先生」をよい先生だと考えています。

また、児童生徒は「おこらない先生」よりも、「悪いときはきびしくしかってくれる先生」を望んでおり、保護者・教員も「悪いときはきびしくしかってくれる先生」を支持しています。

問題行動が発生したときに、集団の秩序と安全を守りつつ個の成長を促すためには、問題行動を起こした児童生徒に対する毅然とした指導が必要です。と同時に、その児童生徒の心情や背景を理解し、共に悩み、自己実現を援助していくような教育相談的な関わりも必要になってきます。その両方がバランスよく機能したときに、個も集団も生かされます。

また、全ての児童生徒に対する積極的な生徒指導も大切です。問題行動を予防したり、個々の力を引き出し成長を促すような開発的な指導・援助も大切です。この指導を通して人間関係を構築し、心の居場所のある温かい学級をつくることは、児童生徒の社会性を育てるのに効果があります。

**学校は発達段階や個々の生活背景を考慮に入れて、児童生徒の心理を把握することに心がけましょう。**

**「愛の一声」をかけましょう。児童生徒の声に耳を傾けましょう。**

**学校全体で、生徒指導と教育相談のバランスのとれた指導体制を確立しましょう。**

### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

「先生にめぐまれている」と感じている児童生徒は、そう感じていない者より、規範意識が高い傾向にある。 ----- 37～38

「よい先生」の条件の上位3項目(全11項目中)は、次のとおりである。 ----- 41～42

- ・児童生徒にとって... 「明るく楽しい先生」, 「気持ちをわかってくれる先生」  
「授業がわかりやすい先生」
- ・保護者にとって..... 「分けへだてしない先生」, 「悪いときはきびしくしかってくれる先生」, 「気持ちをわかってくれる先生」
- ・教員として..... 「授業がわかりやすい先生」, 「悪いときはきびしくしかってくれる先生」, 「気持ちをわかってくれる先生」

児童生徒・教員・保護者とも、「おこらない先生」をよい先生とする回答は全項目中最下位である。 ----- 41～42

「学校生活満足の理由」は、小・中・高とも「友だちがいる」が最も多く、全体の約8割がそう感じている。 ----- 37

「友だちの行為に対する善悪の判断」では、小学5年生の方が中学2年生、高校2年生より健全な規範意識をもっています。また、項目によっては大人よりも規範意識が高いのです。にもかかわらず、中高生になり規範意識が大きく崩れるのは大人の安易な姿勢にも一因があると思われます。そのような姿勢が、中高生の規範意識を弱めていることを反省する必要があります。社会で許されないことは子どもでも許されないという毅然とした姿勢を貫くことが重要です。

昨今、家庭のしつけ・教育力の低下が問題となっています。将来を担う子どもたちを家庭・学校・地域社会が一体となって育てるという意識が必要でしょう。大人は地域の子どもの道徳や社会規範に反する言動には積極的に働きかけ、健全な倫理観・規範意識の育成にかかわっていくべきです。

「良薬口に苦し」、大切な我が子だからこそ、遠慮せず勇気をもって注意しましょう。

子どもたちの現状を非難するだけでなく、大人自らの言動を謙虚に見直しましょう。学校、保護者、地域で「地域教育目標」および各々の役割を設定し、地域の目指す子ども像の実現に努力しましょう。

学校は地域の行事や活動に積極的に関わりましょう。

学校の情報を積極的に公開し、保護者や地域の声に耳を傾けましょう。

#### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

「地域の問題」について「よその家の子どもをしからなくなった」という回答が教員・保護者ともに最も多く、次いで「隣近所に無関心な人が増えた」、「青少年が地域の人と接する機会が少なくなった」の順である。----- 94

児童生徒の約9割は、「悪いことや迷惑をかけることをしたら、まわりの大人は注意する」と感じており、地域の大人の目を意識して生活していることがうかがえる。----- 92

大人の約8割が地域の子どもたちに対して「道であったときに声をかけたり、あいさつしたりしている」と回答し、約半数が「悪いことをしていることに気づいたとき、注意したり叱ったりしている」と回答している。----- 92

教員は「文化的活動やスポーツの指導」や「困っているときに相談にのっている」など、地域で専門性を活かした活動は多いが、「地域の子どもたちとのかかわりはほとんどない」という回答が約3割である。----- 92

「友だちの行為に対する対応の仕方」について、高校生は「自転車の二人乗りをする」「自分の家で酒を飲む」「アダルトビデオを見る」「電車の通路や道路にべた座りする」の4項目で「友だちに注意する」より「自分も一緒にする」の割合が高く、「悪い」という意識が低い。----- 80～81



家庭のしつけがあまりされていない原因として「親自身がマナーやエチケットを十分身につけていないから」と4割以上の教員，保護者がこたえています。また，しつけの悩みとして「自信がもてない」をあげた保護者が約2割います。

核家族化，少子化が進む中で，子どもに対する接し方がわからず，育児不安を抱えている親が増えています。だれにも相談できずに悩み苦しんでいる親のもとで，乳幼児期に親との信頼関係を確立できないまま大きくなった子どもは，学校生活や社会生活に十分適応できないことがあります。

親に対する援助は，子どもに対する援助そのものです。地域ぐるみで，安心して子育てができる環境を整えましょう。

基本的なマナーやエチケットについて，家族共通のテーマを決めて取り組みましょう。

子ども会活動などを通して，世代をこえた地域の人たちが共に集い，共に汗し，共に語らう場を進んでつくりましょう。

シルバー世代・子育て経験者のパワーを結集し，地域の子育て支援体制を整えましょう。

#### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

- 「家庭のしつけがされていない」と思っている教員は9割をこえており，保護者は約8割である。----- 33
- 「しつけがされていない原因」で，「親自身がマナーやエチケットを十分身につけていないから」と回答した保護者や教員は，それぞれ4割以上である。----- 34
- 「進学や就職」「子どもの基本的な生活習慣が身に付いていないこと」について悩んでいる保護者が多い。----- 35
- 「しつけや教育に自信がもてない」保護者は，全体の約2割である。----- 35
- 「地域社会」について問題と考える割合が最も高いのは，教員・保護者ともに「よその子をしからなくなった」で，次いで「隣近所に無関心」である。----- 94
- 「望ましい成長発達を支える取り組み」として「家庭でのしつけや教育の大切さについての啓発」が必要であると回答している大人が3分の2以上で，極めて多い。----- 99

メッセージ9  
(家庭・学校・地域社会へ)

## 思いやり、輪と場を拡げてボランティア

ボランティア活動の基本は、思いやりの心と実践する行動力です。多くの子どもたちがボランティア活動に対して関心を持っています。ところが、実際に参加したことのない子どもたちがたくさんいます。思いやりの心は十分持っているにもかかわらず、実践行動に結びついていないというのが現状です。

また、受動的であっても、参加した子どもの参加後のボランティア活動への関心はかなり高まっています。

子どもたちの社会性の不足が指摘される今日、体験的な学習としてのボランティア活動に気軽に参加できる機会を提供することは、重要な意義があるものと考えます。

子どもたちの思いやりの心を、関心だけにとどめることなく、着実な実践活動へ結びつけたいものです。

「やってみないとわからない、やってみてはじめて気づく」、まずは、やってみる機会を与えることから始めましょう。

地域や保護者・学校が一体となって、日常的なボランティア活動を推進しましょう。

ボランティア活動に関する情報を積極的に収集し、活動する場を豊富に提供しましょう。

### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

ボランティアに「他の人から誘われて参加した」「学校の授業や行事・町内会などの地域活動として参加した」と回答した児童生徒は、「参加したことがない」者より、関心があると回答した割合が高い。 ----- 86～87

ボランティアに関心の高い児童生徒は、低い者より、「ジュースの空き缶を道路に放置する」「お年寄りに席を譲らない」について「悪い」と思う割合が高い。 ----- 75

ボランティアに対して「関心のある」児童生徒は、全体で5割をこえているが、男女の関心の差が大きい。 ----- 85

ボランティアに対して、「自分から進んで参加した」児童生徒は、1割前後である。 ----- 82～84

## 芽を摘もう、薬物への第一歩

アンケート結果は、たばこ・酒に対して「とても悪い」という意識を徹底して植えつける指導が薬物乱用防止にもつながることを示しています。

たばこ・酒から薬物（シンナー等）にも手をだすようになると言われています。特に常習性の点ではたばこの害は薬物の害と似ていることが証明されています。

児童生徒にたばこ・酒の害を具体的にねばり強く教え、指導することは薬物乱用防止や児童生徒の将来のためにも重要であると言えます。たばこ・酒の誘惑に負けない指導が、薬物の誘惑に負けない強い心をはぐくむ指導にもつながると考えられます。

**未成年のたばこや酒を安易に認める姿勢を改めましょう。**

**たばこ・酒・薬物の害や心身の健康の大切さについて、家庭でも話し合ひましょう。**

**薬物乱用防止のために啓発的な指導に積極的に取り組みましょう。**

### 【メッセージの背景となる主な分析結果】

たばこに対する意識と、薬物に対する意識との間には、相関関係がある。酒と薬物についても同様である。 ----- 65,71,73

たばこ・酒を「悪い」と思う児童生徒のほとんどは、薬物を「悪い」と思っている。また、たばこを「全く悪くない」と思う生徒の2割以上が薬物に対しても「悪くない」と思っている。 ----- 73

「望ましい成長発達を支える取り組み」で「薬物乱用防止対策に関わる啓発活動の推進」を上位にあげている大人が、1割強いる。 ----- 99

「地域の問題」としてあげられる上位3項目は、「よその家の子どもをしからなくなった」「隣近所に無関心な人が増えた」「青少年が地域の人と接する機会が少なくなった」である。 ----- 94

「現在の青少年の憂慮すべき点」について、教員・保護者の合計では、「自分の感情や欲望がうまくコントロールできない」が上位にあげられている。 ----- 96~97